

過ぎゆく駒の足はやく、
 妾も十歳とそのうへに、
 二つ三つ四つかさぬれば、
 おもき病のその床に
 臥させ給ひてたらちねの
 母は日ならず世を去りぬ。

一人の母にまのあたり
 我はわかれて悲しさの
 思ひに堪へぬ身ながらも、
 樂しき國へ母うへは、
 往しなりけりさらばさて
 やう／＼こゝろ慰さめつ。

伯父なる人の其もさに
 行くべくなりし其日より、

寺にまうでし御佛の

御名を唱へてたらちねの、
 母にたむくる仕業より
 樂しきことはなかりけり。

或日傍へに伯父上は

わらはを招きたまひつゝ、
 御身も十と五歳の
 春を迎へぬいつまでも、
 かくてあるべき身なられば、
 嫁いりせよと宣たまひぬ。

否さいなめば伯父上は、
 何ゆゑなるぞと宣給ひぬ。
 否よくさいくたびか
 いなめば伯父も幾たびか
 何故なるぞさいぶかりつ、

怪しき娘よと宣たまひぬ。

我はやうく伯父上に、

嫁いりすれば御ほさけの

寺にまうて御佛の

御名をさなへて母うへに

たむくる業もならざらむ、

いなよくさこたへけり。

さる事なしと伯父上は、

笑ひ給ひてくれぐれも

さらばさいひて其年の

くれに妾はふるさとの

よしある家に嫁しづきぬ。

夫なる人は優しくて、

嬉しき日をば送りしが、

母なる人はつれなくて、

日をふるまゝに空蟬の

世にたのしみの寺にさへ

詣であたはずなりにけり。

寺にまうてぬ苦しさを

君はえ知らず聞き給へ、

夜なく鬼の顔はれて、

われをさいいなむ苦しきの

夢かと思れば現にも

鬼のすがたの消えやらで。

わらはが罪の海よりも

深しと思れば苦しきの

いよよこゝろを苦しめて、

或夜ひそかに我夫の

家たのがれて又伯父の
もきにぞわれは戻りける。

かくて妾は其日より、

寺にまうで、御佛の

たふとき影のみ夢みつゝ、
一年あまりくらしに

伯父は六十路を限にて、

遂にこの世を身まかりぬ。

世に父母も兄弟も

なき身を哀れいかにせむ。

馴れし都をよそにして、

身を雲水にまかせしは、

十と七歳のむかしにて、

おもへば夢の世なるかな。

優しかりける我夫も

今は六十路の坂越えて、

かうべに霜やおきつらむ。

あはれ尊き御佛の

たのしき國にわが夫を

待つぞわらはが願ひなる。

さらばさいひて哀れなる

尼は御厨を身に負ひて、

杖に縋りてさぼくさ

いく重かさなる白雲の

峯より峯に深山路を

覺束なくも越へて行く。

い
つ
つ
い
て
て
草
草

序

詩とは何ぞや、無形の想之を現はすに有形の物を以てす、是を是詩といふなり、故に既に詩といふや、形を離れて想獨り存することを得ず、想を離れて形獨り存することを得ず、必ずや想形相待て、爰に始て詩の存するものさす、然して彼想なるものは虚なり、形なるものは實なり、故に又詩を作らんとするものは、必ず此虚實の妙用を知らざるべからず、蓋し虚は猶實の如く、實は猶虚の如し、虚々實々、實々虚々、之の亦、之の亦、妙の亦、妙能く之を究め、之を盡せるものにして、始て妙詩を作ることを得べし、昔人シエクスピア、ミルトン、バイロン、

プウシキンの如き、よく鬼神の巧を
奪ひ、造化の腕を扼して、千歳不滅の
名作あるものは、實に此虚實の妙用
に達せるに由らずんば非ず、後の詩
を作るもの、宜しく此に鑑むべきな
り、因て以て序となす。

於時明治卅年二月中旬、落葉ちる浮
世の嵯峨の屋の破窓下に

小むろ識

いつ真で草

嵯峨の山人

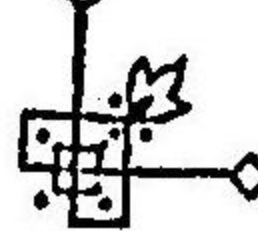
山蔭の翁

山蔭のはにふの小屋を
誰歟いふ浮世の嵯峨と
板びさし月も洩るなり
葎はふ窓を開けば
うき我にももの思へこや
冷まさる野寺の鐘
かうくこ無常を語る
はらくこ落る木葉を
時雨かこ嵐にこへげ
から衣うつ音とかはる
ながらへて世をば忍べば
ふり注ぐ涙の雨に

敷妙の袖も打ゆく
あゝ浮事を誰に語らん
すみわたる月に向ひて
語らひし友はさ問ば
木枯の果にさ答ふ
鳴渡る雁を呼びて
契にし人はさ問ば
苔むせる塚の下さいふ
あゝ戀命一夢なりけり

厭ふ浮世

紅葉するゆふべの山に向ひては
何を歎しのお我心
ふり注ぐ暮山の雨に對しては
何を歎うらむ我心
思へばく神よ汝は



何さて我を生みにけん

思へばく浮世さは

浮める雲の世をやいふ

世を棄つ世に棄られつ

幾歳をふるさこの月

忍べどもまた忍べども

昔に返す由もなし

いざさらば名利の二ツ

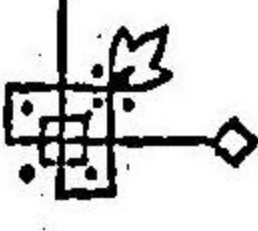
断てぞ入らん山の奥

うめの風のふかぬ山蔭

真如の月を友として

白髮翁

散てゆく花の蔭に
わが身の春は消ゆきて
うき世の秋の身にぞしむ



あしたゆふべの風さむし

山をも抜んいにしへの

力も今はおそろへて

猪をも打ん古の

血氣も今は影もなし

世を秋風の鬢を吹て

黒髪の雪さかはれば

戀故もえし胸の火も

空しくもえて消にけり

闇の悪魔のわれに來て

ゆふべの夢をおごるかせば

苦や樂やみだれくゝて

心の海に波をあぐ

甲斐なきものは老の身よ

昨日のうきを送りては

今日の悲しみむかへつゝ

何をまつきて世には住む

嗚呼戀命をわしも知らず

人の身の幸をわしも知らず

一生を仇にくらして

月影のかたむく今

何を悔てて身を恨む

打よ煩腦の犬

ふるへよ断忘の劍

世の羈絆きりはらひて

一心に彌陀をたのまん

南無阿彌陀佛々々々々々々

甲斐なきものは老の身よ

昨日のうきを送りては

今日の悲しみむかへつゝ

何をまつきて世には住む

嗚呼戀命をわしも知らず

人の身の幸をわしも知らず

一生を仇にくらして

月影のかたむく今

何を悔てて身を恨む

打よ煩腦の犬

ふるへよ断忘の劍

世の羈絆きりはらひて

一心に彌陀をたのまん

南無阿彌陀佛々々々々々々

荒野の曙

東雲に殘月消て
朝風に霧の晴れば
面白し萬里の平沙
蓬枯て風寒く
人跡絶て霜白し
山あり左手に聳ゆ
杉あり嶺に長す
鶯あり天空を舞ふ
大なる哉沙漠の眺
天高く地ひろし

おさなご

塵の世の塵にそまぬ

おさな兒の心ぞきよき
すやくされむるゆふべ
燈火の影に見れば
うちけむる眉の匂ひ
露たるゝ頬の笑顔
びいなすの神の化神耶
人を戀ふ夜半のなげきも
きぬくの別の涙も
つれなきを恨む思ひも
戀も無常も露知らず
春を待つ胸のれぎ言
おちぶれし日のうき貧苦
餓凍世のいつはり
其をしも露しらす
小やかな二布の蒲團に
清やかな夢を結びて
罪もなきれのやさしさ

神ぞ可愛き我愛よ
守らせたまへ我神よ

かたみ

散てゆく花一片の命にも
造化の力こもりぬき
思へば愛のまさるらむ
捨てある反古一枚の紙なれど
友のまごころこもりぬき
思へば愛のまさるらむ
うつろはぬ花の昨日を思ひては
なき人の身の忍ばれて
盛なる友の昔を慕ひては
昨日の花の忍ばれて
かり染の書捨ながらなき人の
形身さなりし反古一枚



水のおとづれ

序

『爾曹何を見んさて野に出でしや、風
に動かさるゝ葦なるか。然は何を見
んさて野に出でしや、美服を衣たる
人なるか、美服を衣たる者は王宮に
在り』と云へることを聞けり。予の詩
卷は野なり、予が詩を讀む者は即ち
野に出でたるなり。もし美服を衣た
る人を見んさて欲はゞ、即ち返りて王
宮に往け、美服を衣たるものは、王宮
に在ればなり。夫れ予が詩は風に動
かさるゝ葦にだも適はざらんこと
を恐るものなり。

予の詩は即ち風に動かさるゝ葦にだ
も適はぬものなるが故に、予は之を
以て必ずしも多く人を動さんとな

願はず人をして聊か思ふ所あらし
むることを得れば足れり。

鶴の歳暮立つ朝山王邸下の淵
明堂にて

著者識す

水の音づれ

湖 處 子

失題

まれに來ませし君なれば、

こゝろをちやくにくだげども。

さもしき宿は何ひさつ、

すゝめむものもなかりけり。

さいはひうらの菜の圃に、

われといても子と二人して、

まさたる豆のこのころは、

いさうつくしくみのりたり。

まさたるまゝにうちすて、

土のふここともなけれども、

さもしき宿さおもひてや、
茨もふさ／＼みのりたり。

時はたてどもあまりにも、
こゝろありげにみえたれば、
さもにをしまて朝夕の、
ながめさこそはなしにけれ。

けふはひさしき君ゆゑに、
さりとさゝげむこのほかに、
何はなくともこの豆の
こゝろをきみもうげよかし。

讚美歌

足るてふことを知りてより、
心はやすくなりにつけり。

今まで問なく言あげて、

なにしか神になげきけむ。

人にきほはむ心より、

わが家せばくおもひつれ、

うきたる願うちずてよ、

住めば住むにはあまれるを。

出づるに入るに人のごき、

馬も車もなけれども、

世に負ふさころあらざれば、

こゝろに恥づることなし。

朝夕たいて食ふものは、

うらの圃の菜なれども、

おのがつくりしものゆゑに、

あはしさおもふものはなし。

たちぬふ業も子のもりも、
一人してする妹子ゆゑに、
心もしらぬ人の子を、
つかはむまでもなかりけり。

さもしき宿を宿さして、
こゝろをくたく様見ては、
あはれなりさはおもへども、
妹子はさりさもつぶやかす。

夜は二人がうちさけて、
うち笑む顔を子に見せて、
中にまへはる人をなみ、
はどかるこどもなかりけり。

さしも障のおほき世に、

われと妹子いもこと思ひ子を、
きのふもけふもつゝがなく、
くらすがうへの幸やある。

足るてふことを知りてより、
こゝろはやすくなりけり。
今まで間なく言あげて、
何しか神になげさけむ。

あるとき

かすくつもるまがこゝろを、
わが身ひきつにたまちかれ、
今はさ藤にくづなれて、
神のめぐみをねがふとき、
うき世の人のこゝろ根を、
しみくこゝろおもひやれ。

小川

長くもあらぬ秋の日は、
 さすらふほごにくれにけり。
 はなやかなりし夕紅ゆふぐの、
 空もやうやく颯むなり。
 稻をかりける賤の男や、
 束をつくりしをさ女らが、
 にぎはひたりし千まち田も、
 夕になれば人はなく。
 たてる狹霧をふすまにて、
 れむるに似たるすがたかな。
 小川の流唯ひそり、
 さしやきつゝぞながれゆく。

知らぬ旅路にゆきくれて、

こゝろは宿にいそげども、
 野中の里の程さほみ、
 あたりにさはん家もなし。
 鳥は林にかへれども、
 われをれくらにさもなはず。
 鐘はまぢかにひびけども、
 見ゆるかぎりは寺もなし。
 影だにそはぬ墨ぞめの、
 ゆふべにひそりまごひつゝ。

小川の流唯ひそり、
 たゆたひもせずながれゆく。

あはれ小川よ爾ながほかに、
 旅のしるべも今はなし。
 水のなかれを爾か胸に、
 くまざる人はなかるべし。
 あはれ爾かゆく方にこそ、

里も宿りもあるべけれ。
野はくれたれど爾が聲を、
こめてたどらん何處までも。
小川の流さら／＼と、
さそふが如くながれゆく。

里の子

里の小川を來て見れば、
小魚いさなさるさて子ごもらが、
きのふもけふもくる／＼まで、
水をぞすくふうちむれて。

いさら小川のさら／＼と、
たえず月日はながるゝを。
里の子ごもはいつまでか、
しまらぬ水をすくふらむ。

水聲

やなぎの蔭にながれ來て、
なにをかたるか知らぬども。
いさ／＼小川のさら／＼と、
きゝすてがたき水のおこ。

道ゆく人よたゝすみて、
君もあはれさきけよかし。
橋のしたにて人しれず、
むせぶがごとき水のおこ。
かしらに雪をいたゞきて、
今日たちかへるたびころも。
わがささ川はいまもなほ、
聲をさなくてながれけり。

忘れ水

いづこの野べに里川を、
わかれて来たるわすれ水。
たつきもしらぬ原なかに、
覺つかなくもながれ來ぬ。

覺つかなくも流れ來て、
覺つかなくぞながれゆく。
茅かやが下にうもれては、
うしなはるらんこゝちして。

はては二たび里川に、
あふべきものさおもへども。
茅はら萱ばらはるぐさ、
そのゆく末をおもひやる。

摘艸

菜籠さげたる少女らが、
五人、六人、七八人、
一になりて春の野の、
わか菜つみにさいいで來なり。

樹陰草むらこゝかしこ、
なほしら雪はのこれども、
緑のいろは萌いで、
わか菜つむべく野はなれり。

射すやのどけき朝日かけ、
うらくなびく春かすみ。
鳥も野ばらにうち出で、
聲おもしろく歌ふなり。

やがて野はらにいて來れば、
さもにさいひし友ごちが。

思ひく〜に下りたちて、
かなたこなたにつみそめぬ。

つむにいさなきわか葉より、
ほかに心はなかるらし。
はなれつ合ひつをさめらの、
袂やうやくわかれたり。

問へばあなたに應へつと、
うたへば聲をあはせつと。
つみてわかるゝ友ごちの、
なかをへだつる朝霞。

よめなたむぼと蓬くさ、
つむにまかせていつしかさ。

わかるゝさしもなけれど、

ひさりく〜になりにけり。

あるは堤をくだりつと、

あるは野みちをたづねつと、

あるはいくつか畔をこぼ、

さほき田面にあさりつと。

根芹あらひてさら〜さ、

ながるゝ野路のさどれ水。

こゝにも一人つみやする、

岸に菜籠の見ゆるなり。

やがて野はらは其まゝに、

かすみのものさなりにけり。

むれきし子らはちりはてと、

一人も見えずなりにけり。

道ゆく人を呼びかけて、

鶯のみぞうたひける。

日かけに翼うちのとて、

鶯こそ空にまひあそべ。

四方にちりにしをき女らは、

ひろき野ばらをつみはてし。

やがて野すゑになればまた、

ひそりくさあらはれぬ。

おくれし友をよばひつし、

つみしわか菜をくらべつし。

五人、六人、七八人、

一になりてかへるなり。

春のゆうべ

むらさきの

ゆうべの空をながむれば、

もよ千鳥こそさびかよへ。

むかふさころはこそなれど、

おのが城に

いそぐ心はおなトかるらん。

すみぞめの

ゆうへの野邊を見わたせば、

ささ人こそばゆさちがへ。

むかふさころはこそなれど、

妻まつ宿に

いそぐころはおなトかるらん。

菖蒲

池のかゞみに影見えて、
一もささけるあやめ草。
めでにし人の面影も、
さまれる如き花ふまひ。

仲秋

年に一夜の月をまつ、
人のこゝろのかよひけむ。
秋のくせさて定めなき、
空も今よひははれにけり。
秋のくせさて定めなき、
空も今よひははれたれば、
光みちたる月かげを、
あほがぬ人はあらざらむ。

葦

ながれつきせぬ古川の、
みぎわにしげるむら葦も。
あはれうき世の秋風に、
ふかれくゝて枯れにけり。

薄(さる婦のために)

わらはをきみのこひしくば、
野へに出て見よ花薄。
さしうつむきて立つさまは、
ものおもふわがすがたなり。

枯野

いづれかるかやいづれをば、

尾ばななりきさわきて見む。
にしきなりつる野邊はしも
たゝ一いるにかれにけり。

浮世美人

おしろひつけしそのおもて、
はやりのころもきかざれり。
すがたを見れば上もなし、
こゝろは何をおもふらむ。

警矯飾

人目よそほふ見えをすて、
おのつからなるまごゝろに、
復れ世の人たび人が、
そのふる里にむかふこと。

厭戦闘

かちぬまけぬき世の中の、
のゝまりさわぐ聲きくは、
木すゑをばらふ秋風の、
音づれよりもなほつらし。
わが世たのしむ民のため、
いくさを廢むる術あらば。

ものさわがしきこのころは、
さびしき野べもかひあらず。
葦間をわたる風にさへ、
おどろかさるゝわがこゝろ。



雲雀

てる目のかげものごかにて、
うらくかすむ野のすゑや。
茅花ぬきにと來去子らは、
茅花をぬきてゆきにけり。

あさには一人たれやらむ、
うたひつゝ來る聲すなり。
ひろき野ばらなたと一人、
うたひつゝ來る聲すなり。

見れば霞のあひたより、
うらなつかまき少女子の、
こぼるゝばがり手にしたる、
茅花よみくいで來なり。

年齒は八か九か、

みじりの髪をうちかぶり、
おのづからなるすがたにて、

茅花よみ／＼いで來なり。

出でくる少女ゆくりなく、

耳をすまして佇みぬ。

ものゝ音する傍の、

うばらが巾をいふかしみ。

うばらが巾を掻き分けて、

見れば奥ふかき葉のなかに、

ひばりの雛の四、五、

親さやしたふ餌さやなく。

何なりとも見まはせば、

芝生のうへにちりたるは。

餌にあらずして親さりの、
かたみのはねのこゝかし。

少女はそれさころづき

茅花をかみてふくませぬ。

茅花ふくみて雛はしも、

あやしきまでにしづまりぬ。

いかにあはれさおもひけむ、

いかにいさしくなりにけむ。

遊びざかりのをさめ子が、

日ごとに來ては餌をやれり。

親さおもひて口あけて、

餌をよびたつる様見ては、

またいわけなき子心も、

親のころになりぬへし。

雛のそたちのすみやかさ、

いつしか羽もはへたれど。

をさめは雛がさぶまでの、

日かすをながくおもふらむ。

ある日のをさめが來てみれば、

雛はおのゝ己がと、

心ぶさくも巢をいで、

芝生さびつゝあるきつゝ。

雛をひろひて巢にいれて、

枝をりかけて歸りけり。

歸りしまゝにのをさめ子は、

ふたゝび見ぬすなりにけり。

雛はさぶべくなりたれど、

少女はたねて來ざりけり、

雛のそたちのすみやかさ、

いつしか羽もはへたれど。

をさめは雛がさぶまでの、

日かすをながくおもふらむ。

ある日のをさめが來てみれば、

雛はおのゝ己がと、

心ぶさくも巢をいで、

芝生さびつゝあるきつゝ。

雛をひろひて巢にいれて、

枝をりかけて歸りけり。

歸りしまゝにのをさめ子は、

ふたゝび見ぬすなりにけり。

雛はさぶべくなりたれど、

少女はたねて來ざりけり、

雛はたつべくなりたれど、
少女は遂に來ざりけり。

あはれ誰家の子なりけむ、
あたりに見ゆる家もなし。
あはれ何さかしたりけむ、
たはて逢見し人もなし。

このあさぼらげきて見れば、
みなし子なりしあげ雲雀。
數もそろひて久かたの、
雲居にまひつあがりつ。

牽牛花

すみてながるゝささ川の、
水のかゞみに影みえて、
なびく薄の穂のうへに、

見ゆる一つの艸のいほ。

軒もひさしも朽はてし、
門にはおふる八重葎。
住すてたらむ家のごと、
いつ來て見ても戸はさせり。

あるトの賤は老たれど、
まづしき身ゆゑひまなくて。
野らにゆくにも歸るにも、
星を見ざるはなかりけり。

妻子のあらずなりしより、
そのまゝ一人すぎにけり。
身にわづらひのなくてこそ、
世はやすかれさおもひけむ。

さはあれ年のつもるほど、

あはれみふかくなりぬらん。

餘處のこしまでわがうへに、

思ひくらべてなげきけり。

涙ばかりはあまれども、

ものも力もなき身にて。

世をおもふかひのあるべくも、

おもひけるこそあはれなれ。

今は身も世もすてはてし、

こゝるゆたかになりぬらし。

あけくれ星はみてゆけど、

あゆみはゆるくなりけり。

ある年秋のあさぼらけ、

霧が宿をさひ來れば。

いつ牽牛花はうゑつらむ、

垣根を蔓ののぼりたり。

朽たる垣もいつしかさ、

青葉のころもまさひけり。

いく重さもなく引むすぶ、

みさりの蔓をひもにして。

ありあけごさにさきかはる、

花はしる妙、瑠璃のいる、

露のしづくにうるほひて、

なほあざやかに色まさる。

あなうつくしき朝かほや、

ものなき家にみちてけり。

あなうつくしき牽牛花や、

あるトは何さ見るなるむ。

内にさばかり見し花の、

あまりて外に匂ふなり。

路ゆく人もたちさまり、
うれしき見ぬはなかりけり。

そのうつくしき牽牛花を、
見てゆく人にまかせおき。
おのれは野らに出づるらし、
いつ来て見ても戸はさせり。

月日たちまち世はかはり、
垣もすま居も野さなれり。
過し昔をいたつらに、
まれくか岸花の薄。

しかばあれども鏡なす、
その里川をわたるたび。
牽牛花垣ほいまもなほ、
水面にのこるこゝちして。

雪中

野邊も山邊もうすくらく、
十武とあしの外も見えわかつ、
ふる雪なかをたさりても、
ゆくはいかなる人の子ぞ。

孤屋ひつやもるゝ煙より、
目にたつものはなきものを、
みゆきの中をたゞひさり、
いづこに往けるものならん。

いさもいさしき身のうへや、
まゝしき中の子ぞ彼は、
慈愛もふかき乳母許へ、
たづねて歸る子ぞ彼は。

いさは生れてはつかにも、
母を見しりて笑ふころ、
母しにたればいさしくも、
里の乳母許おくられぬ。

乳母か箱にていさはしも、
いささいはひに生ひたちぬ。
いささいはひにおひたちて、
四させになればむかほれぬ。

頃しも秋の末つかた、
庭の柿の木落葉して、
むなしくなりし枝こきに、
うれたる果敷しれず。

うれたる柿を乳母はしも、
いくつともなくちぎり来て、

泣いるいさが手にさらせ、

また來たまへき送りでぬ。

歸りて見れば垂乳根の、

母さいふ人居たまへり。

母さいふ人居たまへき、

いさを懐きても寐たまはず。

いさはこゝろのさひしさに、

乳母をおもはぬ間はなし。

また來たまへき送りでし、

その顔ばせのしたはれて。

ある日おいさにはかにも、

里へき思ひぞたちにける。

際しもふれるしら雪を、

ものさもせずになゞ一人。

野邊もやまべもうすぐらく、
十武の外もわかぬども、
おいさが目にはさやかにも、
梯のうれたる乳母が家。

梯のうれたる乳母が家、
それをこゝろのしるべにて。
深雪のなかをたどりつゝ、
ゆけどもゆけど雪の中。

今ははるかにゆきくゝて、
姿も見えずなりにけり、
いくつかすぎしひまつ屋の、
けむりのほかに迷ひで。

父はあはてゝ人々さ、

西にひがしにたづねたり、
西にひがしにたづねれど、
ゆくへはしれず雪はふる。

いさはいづくにゆきたらむ、
いさはいづくに在るならむ。
いさやいさや喚ぶなれど、
たねて應ふる聲もなし。

かきりの聲をはりあげて、
いさやいさやささけびても、
こたまの外のことゑもなし、
いさはいづくにゆきたらむ。

いさばうき世をふりすてゝ、
樂しき國にゆきたらん、
いさはたのしき國にゆき、

母のひざにや在るならむ。

深雪の中をさまよひて、

いさやいづこに喚ぶ父に。

母の膝よりうち笑みて、

こゝにこそ應へて居るならむ。

おそよ

隣りもさほきやま里の、

おそよか家を訪ひ來れば、

つもるかうへにつもりたる、

深雪のしたにうもれたり。

あけはなしたる板戸より、

あらしは雪を吹いれぬ。

すき間ばかりのあばら屋に、

おそよはいかに在るならむ。

日はくれたれど燈火も、

埋火さへもあらざれば、

雪のひかりのさすにこそ、

病の床は見ぬもすれ、

父はいづこにゆきたるか、

今わのをさ女たゞひさり、

うちふるへつゝ獨寐て、

獨をばりをまちにけり。

わが足音をきよつけて、

おもき頭をかへしたり、

頭かへしてわか顔を、

うれしさばかりまもりつゝ。

花さのみ見しかほばせの、
生るものさも見えぬまで、
かはればかくもかはるかな、
終ぞちかくなりたらし。

父はさいへば戸のかたへ、
かよわく顔をうちむけつ、
かなしきこころ目にみえて、
さしぐむ涙たまりつ。

あなむごたらし酒のみの、
親はいくまでつれなきか。
今わのきわの思ひ子を、
すてゝいづこに酔たるか。

世になき母の知るならば、
いかにあはれさなくならむ。

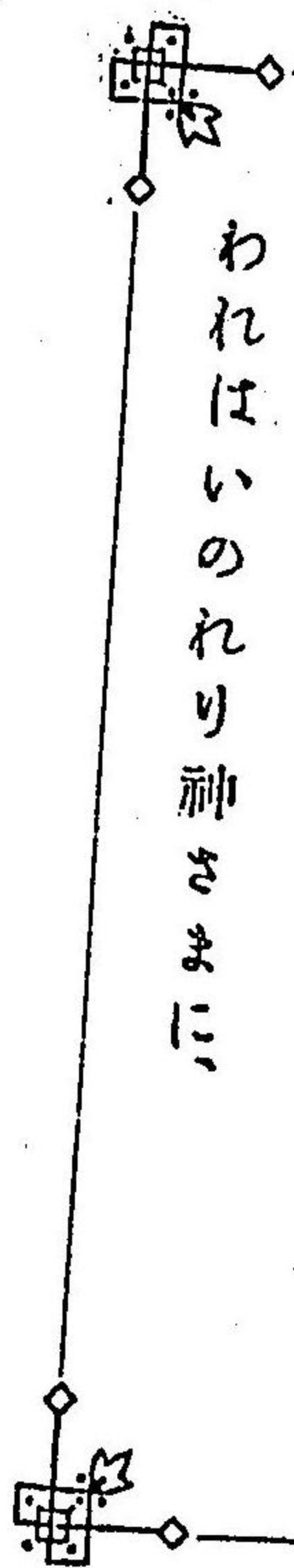
聞くもの見るものいづれかは、
なみだの種にあらざらむ。

あはれ少女よさりながら、
心づよくてあれよかし。
天にまします父さまは、
なれをばいやしますらむに。

かしらふりつゝなき女子は、
絲よりほそき聲れにて。
天にまします神さまは、
われをば天にめしませり。

罪いさふかきわがために、
キリストさまは死ませり。
罪いさふかき父うへに、
かはりてわれもしぬぞかし。

あなありがたきこころかな
 父はかくともしらすらむ。
 父はかくともしらすして
 酒にやひとり酔たらむ。
 されど父にはすくひぬし
 キリストさまのましませば
 きみは一日もすみやかに
 いりて父へをつもへませ。
 よしや病はおもくとも
 父の神さまましませば
 心ばそくてあらずとも
 いのりて癒やすみやかに。
 われはいのれり神さまに

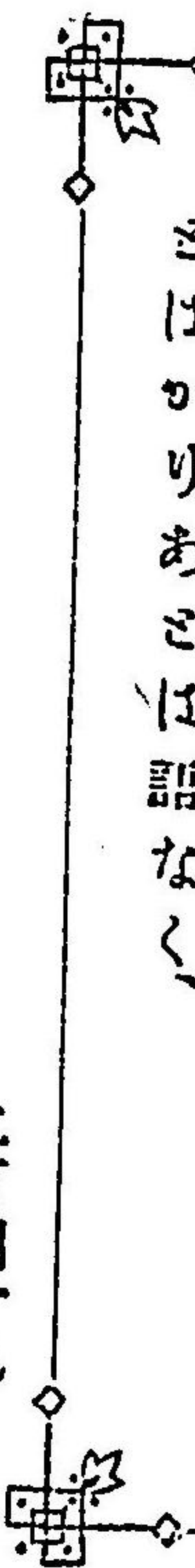


きこしめしたり神さまは
 天づくにへさめしませば
 はやくゆかましその國へ。

あまつ國へさゆきたらば
 いかに幸なることならむ。
 わがたらちねの母ませば
 日ごろしたへる母ませば。

天つみ國はかくばかり
 寒き國にはあらざらむ。
 ぬくき春日にうち出て
 摘艸してや遊ふらむ。

われさへゆかばいかばかり
 さひしかるらん父うへは。
 そばかりあさは語なく



面をふせてなきぬたり。

あなあはれなるをさ女かな、

父はかくさもしらざらむ、

父はかくさもしらすして、

酒にやひさり酔ねらむ。

小きひつきを里人の、

かつぎて出でし夕より、

さゝぬ板戸をそのまゝに、

家はむなしくなりにけり。

人はいふなりうせし子の、

こゝろづくしとわが罪を、

なみだながらにかたりつと、

經よみをうりゆく人ありさ。

疎屋

一もさ松のかたかけに、

ひさり立ちたるあばら屋は、

ひろき野巾の雨かぜを、

耐へていく世か經たりけむ。

のきもひさしも朽はてと、

かたむきかゝる松が枝に。

そのあばら屋の主はたれ、

六十あまりの老ぞさよ、

父よ夫よさしたはれし、

たのしき月日も一むかし、

今は子もなく妻もなす、

うらさびしげに年よれり、

このあばら屋がたゞひさつ、

ひろき野中にたてること。

晝は野やまに夜は宿に、
ひさり出では歸りつゝ、
あるは日なたに背をのべて、
草鞋をつくり繩をなひ、
二十年あまりの年月を、
一日の如くくらしけり。

これより外はさりいでよ、
いふべき事はなしとわかや。
誰にきしてもたれもみな、
これより外にかたらはす。
長き月日をいかばかり、
安くすぎたる人ならむ。

釣翁

田川のすゑの大池に、
つりする翁見すやきみ。

江にしけるむら葦の、
なかなる岩に腰をかけ、
水面の影を朋として、
いつ來て見ても釣すなり。
みぎわの葦はさしぐくに、
芽さしてのびて枯にけり。
庭のまこもいいたびか、
しげりあひてはかられけり。
さばかりものはかはれども、
翁はおなト岩のうへに、
水面のかけを朋として、
いつ來て見ても釣すなり。
里の子どもはつきくに、
生ひて大人さなりにけり。
朝ゆふ見ぬし暁だちも、
やうやくあらずなりにけり。

さしもみどかき人の世を、
のどかにしめて今もなほ、
翁はおなト池の邊に、
いつ來て見ても釣すなり。

君と吾

しら雲を千重にへだて、
黒かみのながき月日を、
靈の緒もたえげたえよき、
一すぢにおもひしころ、
今宵しもかくはかなひて、
鶯鶯のつがひのごさく、
君さわれ一になりぬ、
このうへは死るさもよし、
うつし世のねかひし足れば。

死るさもよしとおもふまで、
かぎりなくうれしき世をば、
いかさまに昔はすぐさむ、
いかにして君さくらさむ、
昔せこは笛をふきませ、
昔はしも琴かいなでむ。
君がふく笛の音トめに、
あひ思ふおもひをうつし。
わがなづる琴のしらべに、
あひおもふ心をあはせ、
君さ吾いもせの中を、
二人して歌ひあるかむ。
世の中はなにさ見るとも、
世の人はなにさきくとも、
よしやねしうたひてゆかむ、
さこそはまで。

わかるゝ際にのぞみては

ふかきちきりの中なれば、
おもへることは山なせど、
わかるゝ際にのぞみては、
何とことばに打いでむ。
たゞすこやかにいませきみ、
たゞすこやかにいませきみ。

寂寞

人めも艸も枯れはてし、
野中にのこるひまつ松。
わが寂寞に泣くがこと、
夜な／＼風にうちむせぶ。

明治卅年四月廿六日印刷
明治卅年四月廿九日發行

定價廿五錢

編輯者 宮崎八百吉

發行者 渡邊爲藏

印刷者 島連太郎

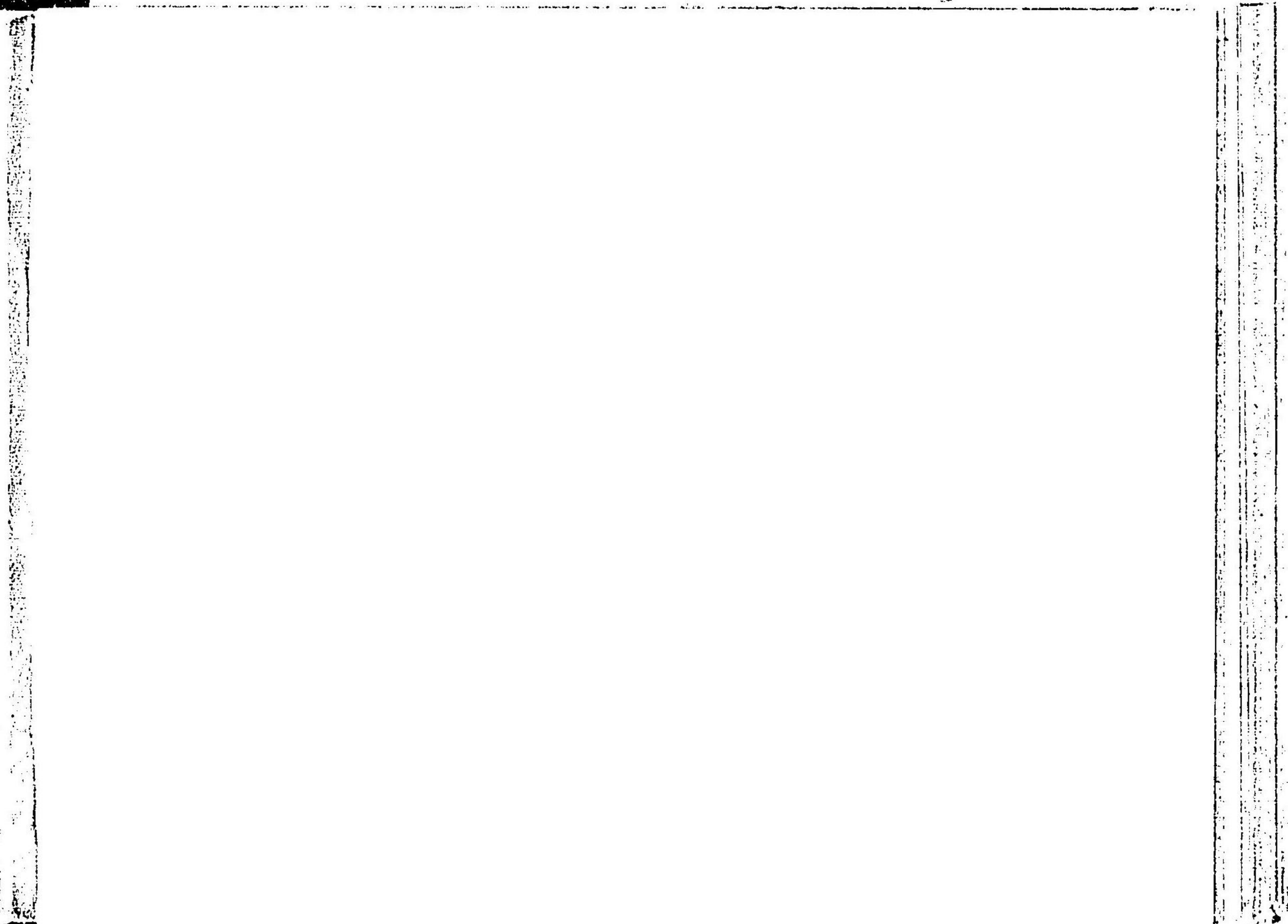
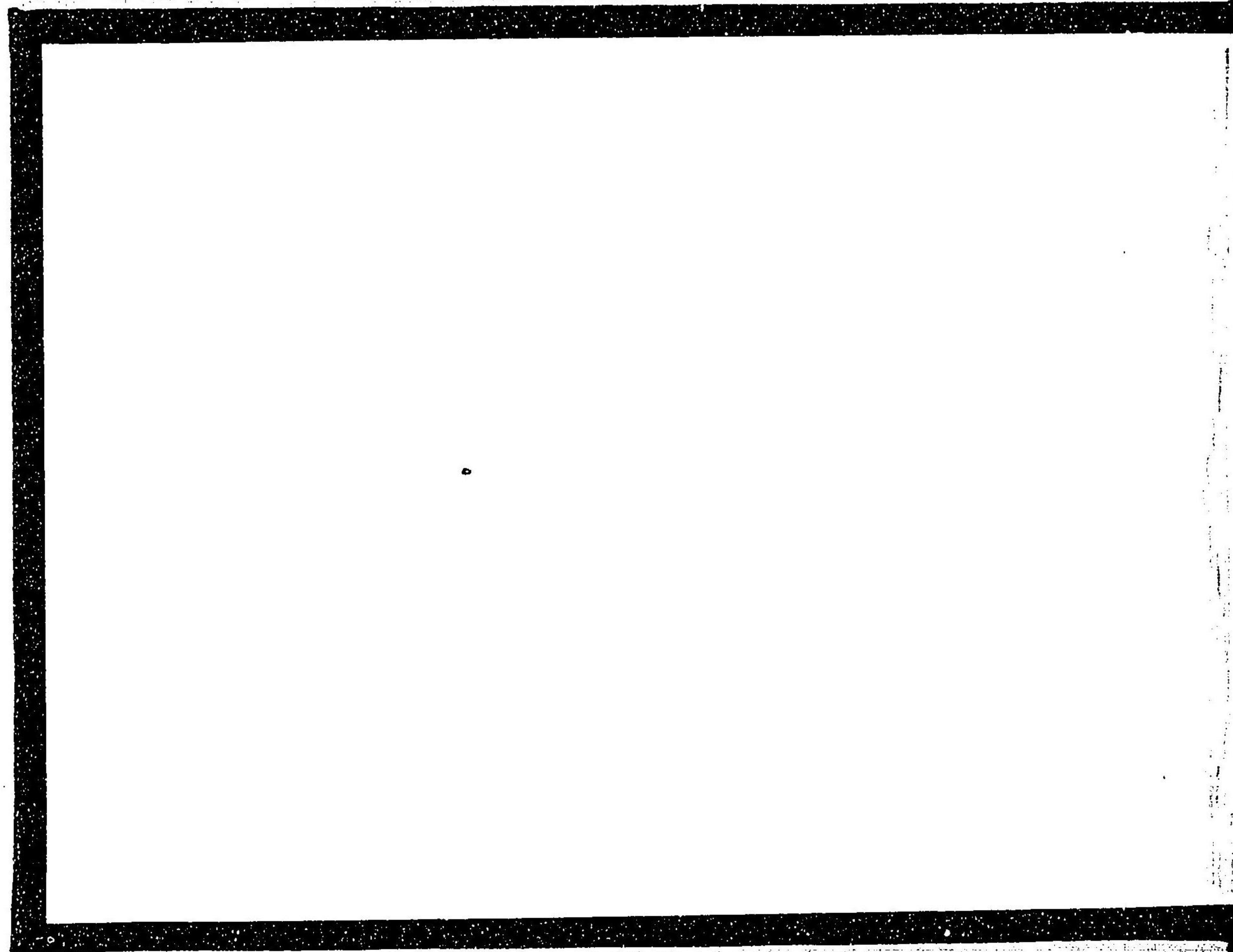
印刷所 株式會社 秀英舍

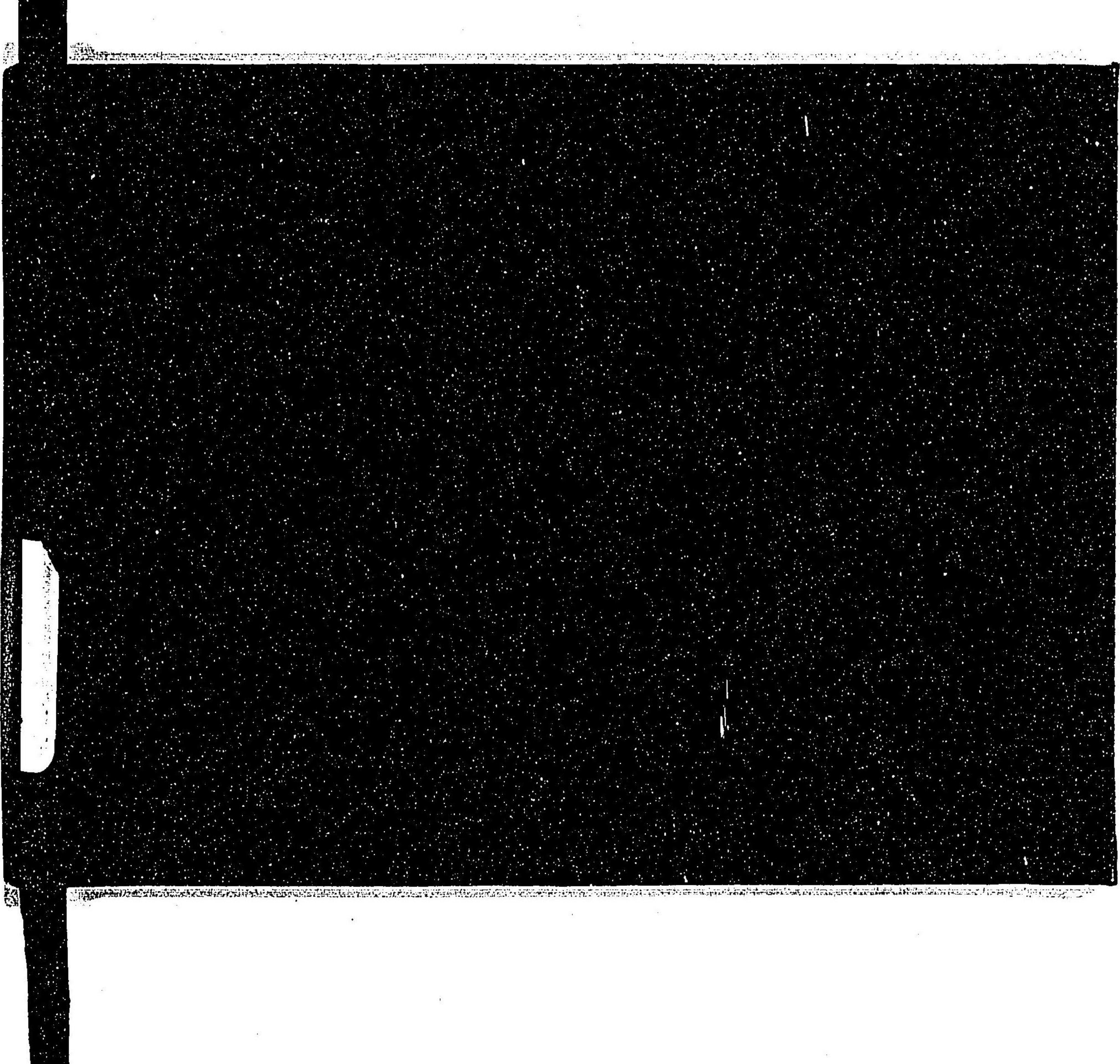
發行所 民友社

東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

東京市京橋區日吉町四番地

IT 62 35





71
114

087985-000-6

71-114

抒情詩

宮崎 湖処子/編

M30

DBG-0075

